



特別企画◎

令和時代の 皇室と国際親善

10月22日、皇居で即位礼正殿の儀が執り行われ、天皇陛下が御即位を内外に宣明された。

平成時代、新しい形の「国民統合の象徴」としてのあり方を示された上皇陛下ご夫妻。

これを継承する令和時代の天皇皇后両陛下には、豊かな国際経験がある。

これまでの連綿と受け継がれてきた伝統を踏まえつつ、新時代の皇室のあり方と、広がる国際親善の可能性を考える。



10月22日、即位礼正殿の儀が皇居「松の間」で執り行われた（代表撮影／ロイター／アフロ）



——10月23日、即位礼正殿の儀が無事に執り行われました。藤崎さんは実際に参列されましたが、どのような感想をお持ちになりましたか。

藤崎 本当に感心しました。あれだけ多くの要人が、実に整然と動かれてスムーズに儀式が執り行われたということ

変わらないものへの 畏敬と安らぎ

——即位礼正殿の儀に参列して

平成の即位礼に事務方として関わった藤崎氏。

三〇年の時を経て令和の即位礼に

参列する中で感じた、新しい皇室と、その国際親善の可能性とは。

中曽根平和研究所理事長

藤崎一郎

ふじさき いちろう 一九四七年生まれ。六九年外務省入省。在米大使館公使、北米局長、外務審議官、在ジュネーブ国際機関代表部大使、駐米大使などを歴任。日米協会会長も務める。

11月10日の祝賀パレードで沿道の人たちに手を振られる天皇皇后両陛下（ロイター／アフロ）

は、関係者がたいへん綿密な準備をされたということだと思います。

日本独自の文化を印象付けた令和の即位礼

——即位礼当日は、どのような段取りで皇居に向かわれた

のでしょうか。

藤崎 私の場合は、まず外務省に行き、外務省関係者とバスに乗って、一時ごろに宮殿の北車寄せから皇居に入りました。皇居では、長和殿で着席して待機しました。また、面識のある方々も少なからずいらっしやいましたので、挨拶を交わしてお話ししました。米国のミネタ元運輸長官など外国の日系の方々も招待されていました。

——即位礼には外国からたくさんのお客様をお迎えしました。皆さん、どのような印象を持たれたと思いますか。

藤崎 宮中にはかなり長い時間いる中で、儀式自体は短時間でしたが、外国の方々も、かえってその一瞬一瞬を重く感じられたのではないかと思います。また、秋篠宮殿下をはじめ皇族の方々はずっと立ったままで微動だにされず天皇皇后両陛下に対する敬意をお示しになれる姿は、外国の方々にもたいへん印象に残るものだったでしょう。

また、日本国の中で連綿と続いてきた独特な儀式が、西洋とも中国とも違う、日本独自の文化を感じさせたのは間違いないと思います。普通に考えれば、両陛下が「松の間」に入ってこれるところをずっとカメラで追い続けるのでしょうか、その様子は見えないようにして、御簾を開けたところに両陛下が立っておられる。たいへん劇的だったと

思います。式が終わった後は、両陛下は静かに退場されました。

もう一つ印象に残ったのは、服装のことです。宮中では正式な機会には男性が燕尾服、女性がロングドレスという格好をするのが通常です。しかし、即位礼では女性皇族が十二単をお召しになるだけでなく、男性皇族も黄丹袍おうにのほろの束帯を着られていましたよね。このような装束は、独特な伝統を示すものとして、各国の賓客にも強い印象を与えたはずです。日本にこのような立派な衣装があるのは誇れることです。もちろん較べるようなことではありませんが、私も駐米大使時代にホワイトハウスに招かれたときは紋付袴を着て、日本の伝統を示しました。

事務方として関わった平成の即位礼

——実は藤崎さんは、平成の即位礼正殿の儀で、外務省の事務局の中心におられたと伺いました。

藤崎 平成の即位礼正殿の儀は、一九九〇年一月一二日に行われました。その年の夏に、当時私は在英大使館の参事官でしたが、帰国を命じられて、即位の礼の準備事務局に配属されました。

即位礼準備事務局では、事務局長を務める儀典長の下に

人が集められました。次長、その下に次長代理が数人いて、次長代理の中でいちばん年次が上だった私が首席代理になりましたが、中心というより大きな組織の一員でした。外務省二階の講堂にたくさんさんの机を運び込んで、事務局としました。

——令和の即位礼は平成のものを参考にしたいと思います。が、平成の即位礼の場合、昭和との間にはさまざまな断絶があり、前例としてはあまり参考にできなかつたのではないのでしょうか。

藤崎 もちろん憲法も違いますし、昭和から平成への変化は大きいのですが、いちおう全部を知っておく必要があります。ですので、六〇年前の古いファイルを一通り読みこんだ上で、案の作成に取り組みました。

そこで思わぬ出会いがありました。当時の古いファイルをめくっていると、同じく外交官であった母方の祖父・藤井啓之助が作成した書類に出くわしました。当時祖父は人事課長で、私と同じように事務方として昭和天皇の即位の礼に関わっていたわけです。六〇年の時を超えた不思議な偶然が記憶に残っています。ほかの人には言いませんでしたが……。

——藤崎さんは、平成の即位の礼では、具体的にはどのよ

うな仕事をされたのですか。

藤崎 私が任じられたのは国別班長で、これは各国の賓客をどのように接遇するかを調整する係でした。どの国の大統領や首相が日本の総理大臣と会うか、どの時間に何分とれるか、どういう行事に随行の閣僚などに出席してもらうか、各国別に代表の警護をどうするかなどの案を作ります。例えば当時の海部総理に会いたいという賓客は何十人というわけですから、いわば枠の奪い合いになります。どのように人数と時間を絞るか、総理秘書官や外務省内の各局と調整しました。

また、台湾やパレスチナなど、日本としては国家として承認していない地域の代表をどのように遇するのか、という問題もありました。もちろん私ひとりでは決めるのではなく、官房長や儀典長に案を提示し、各局とも協議して、みんな慎重に検討し決定していきました。

——準備に尽力されて、即位礼正殿の儀当日は、皇居で晴れやかな気持ちで迎えられたのではないのでしょうか。

藤崎 いやいや、私は即位礼正殿の儀当日を含む数日間はずっと穴倉暮らし（笑）。外務省の事務局に詰め切りでした。特にいまと違って携帯電話が普及していない時代です。私には何かあったらいつでも連絡を受けられるようにしていな



饗宴の儀では、狂言の野村萬斎、歌舞伎の市川海老蔵、文楽の吉田玉男の3氏が共演し、五穀豊穡を祈り舞う「三番叟」を演じた（内閣広報室）

ければならず、即応体制で現場の担当者に指示を出す立場です。ですから、皇居にも迎賓館にもホテルにも行かず、事務局

の部屋でコントローラタワーに徹していました。これはロジの責任者の鉄則です。ですから儀式も要人も実際には見ることもなく、テレビを眺めながら電話にかじりついて式典を終えました。

——心身ともに休まらない日々ですね。

藤崎 本当にそうでしたね。しかも、即位礼に関係した仕事が終わると、日曜日を一日休んだだけで、すぐに月曜から中東問題にかかりつきりになりました。ちょうど湾岸危機から戦争へと推移する時期で、日本の貢献策をまとめるタスクフォースの長を務めることになったのです。資金貢献や物資協力、輸送協力、医療貢献など多岐にわたり、大蔵省との調整が必要な上、当然国会にも説明しなければなりません。

一九九〇年夏に帰国してから年が明けて官房の在外公館課長になるまでの数カ月間は、一種の遊軍的なポジションで、はじめは即位の礼準備事務局というロジの極致の仕事から、急に中東貢献策のように国会と予算が関わる政治の極致のような仕事に携わり、結構忙しい日々でした。

明治二五〇年、その後半期を評価する

——昭和・平成・令和と、日本社会は大きく変化しました。

藤崎 昨年は明治一五〇年ということで、さまざまな回顧が行われました。明治維新を経て列強に追いつき伍そうとした明治人の気概は尊敬に値します。ただ、それに心酔するあまり、過去を賛美し、「昔はよかった」という話になるとすれば、まったく違うと思います。

明治以降の一五〇年は、太平洋戦争の終結を境に二つに分けることができます。一九四七年生まれの私は、後半の時代をほとんど生きていくわけですが、一度も戦争を経験せずにすみました。前半の七五年は違います。もし私が明治元年（一九六八年）に生まれていたら、二六歳で日清戦争、三六歳で日露戦争、五〇歳でシベリア出兵、六九歳で日中戦争、七三歳で太平洋戦争と、生涯戦争が続き、そして最後に国が減んでしまったわけです。

戦争の時代だったことを反映するように、戦前の総理大臣三〇人のうち半数以上の実に一六人が軍人で、軍事費は通常でもGDPの五〇程度、戦時には二〇〇%にも達しました。戦前における軍の影響力の大きさがうかがい知れます。太平洋戦争に向かう中、無謀な軍に対して生命どころか職でさえも賭して立ちふさがろうとした指導者は、ほんの数えるほどしか現れなかったのです。

——戦後は一転、平和の時代でした。

藤崎 他国に出兵することなく、世界のほとんどの国と良好な関係を保ち、世界三位のGDPを誇るに至った戦後日本の方が、国民にとってよい時代であることは間違いありません。

——時代にあわせて、皇室のあり方も大きく変わりました。

藤崎 現人神だった昭和天皇は戦後「人間宣言」を出され、また日本国憲法において「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」と位置付けられました。戦後初期にはご退位論もありましたし、また昭和天皇が崩御された際にも、私が当時勤務していた英国などではさまざまな議論がありました。昭和はまさに激動の時代でした。

平成に入り、現在の上皇陛下、上皇后陛下は、被災地への慰問や慰霊の旅を重ねられる中で、国民に寄り添う、新しい天皇、皇后像を作られました。そのお姿は国民に広く受け入れられたと思います。そこに昭和とは違う変化があるし、また新しい定着があると思います。

——令和の時代の皇室をどのように展望されますか。

藤崎 皇室のあり方という面からみて、平成と令和は類似するのではないかと思います。上皇陛下も天皇陛下も国民に寄り添おうというお人柄ですし、上皇后陛下も皇后陛下も、民間出身の方です。

このように時代やその時々、の天皇皇后両陛下のお考えで国民との向き合い方には違いがあつて当然です。その上で皇室の意義は大きな意味では変わらないことにあると私は思います。世の中はどんどん変わつていきますが、日本の中心に象徴としての天皇がおられ、永きにわたつて日本を見守つている。このことが、日本国民の安心感につながり、尊敬の念を生んでいるのでしよう。今回の即位礼は、古来からの儀式が、細部に変更はあるにせよ、連続と続いていることを見せることで、改めてそのことに気付かせてくれたと思います。

令和時代の国際親善

——皇室の国際親善について、その意義を改めて伺います。

藤崎 私はブッシュ、オバマ、トランプの三代の米国大統領が宮中訪問した機会に宮中に伺わせていただきました。これらの大統領は皆、自分のカウンターパートであり実務を協議する総理大臣と会うときはまったく違う雰囲気でした。政治からは独立した国民の象徴として天皇陛下が皇居にいらつしゃつて、しかも脈々と続く歴史があることに、外国の賓客も尊敬の念を抱いているのではないでしうか。

——天皇皇后両陛下は、英国や米国への留学経験をお持ちですし、今後の国際親善も大いに期待されています。

藤崎 今年五月、トランプ大統領が訪日時に、天皇皇后両陛下が宮中晩餐の際、通訳を使わずに実に楽しそうにお話しされている姿を拝見したことは、強く印象に残っています。新しい可能性を感じますし、これから外国へのご訪問にも注目が集まるでしよう。

皇室の国際親善は外交の手段として位置付けられるべきものではありません。また、単に外国ご訪問の回数を増やせばよいということでもないでしよう。

ただ、皇室の方々が外国にお出かけになるだけで、現地のメディアの報道も含め、その親善効果は計り知れないというのも事実です。私の記憶に残っているのは、二〇〇九年、上皇陛下および上皇后陛下がハワイを訪問された時のことです。私は駐米大使としてお供させていただく機会を得たのですが、日系人を含む米国人たちが非常に興奮していました。政治家の訪問では感じられない、ある種の精神的な高揚なのだと思います。

天皇皇后両陛下には、今のままのお姿でお楽しみながら国際親善を進めていただきたいですね。それがいちばんではないかと思ひます。●